WEP

VOL. 127
ウエップ
俳句通信

俳句通信

特別作品25句　下鉢清子「何となく」

特集〈柳生正名『兜太再見』を読む〉

堀之内長一　「兜太、言葉としての」
角谷昌子　「言葉の探究者兜太」
坂口昌弘　狼の神と蛍の魂――『兜太再見』を読んで
田中信克　『兜太再見』その「再見」の意義を考える
岸本尚毅　「『兜太再見』を読む」
後藤　章　『兜太再見』の距離感
筑紫磐井　オオカミと熊――『兜太再見』を読む
西池冬扇　「ひよってるやついる？　いねえよな？」

【近詠30句】
谷口智行「こころひそかに」

【競詠20句】
小田島 渚「巨き船」
安里琉太「日月抄」
吉田哲二「盆の窪」

●作品●加藤耕子・岸原清行・菅野孝夫・尾池和夫・岩城久治・松岡隆子・草深昌子・松尾隆信・高野ムツオ・南うみを・上野一孝・関　成美・岩永佐保・江中真弓・石倉夏生・すずき巴里・岩田公次・宮谷昌代・榆田良枝・福神規子・和田洋文・浦川聡子・篠沢亜丹・音羽紅子ほか

あせび

馬酔木

ツツジ科の常緑低木。

3～5月に枝先に小さな壺上の花をたくさん咲かせる。

有毒植物で、その葉を馬が食べると、酔ったようにふらふら歩くことが、名前の由来。

別名・アシビ、ヒガンノキとも。

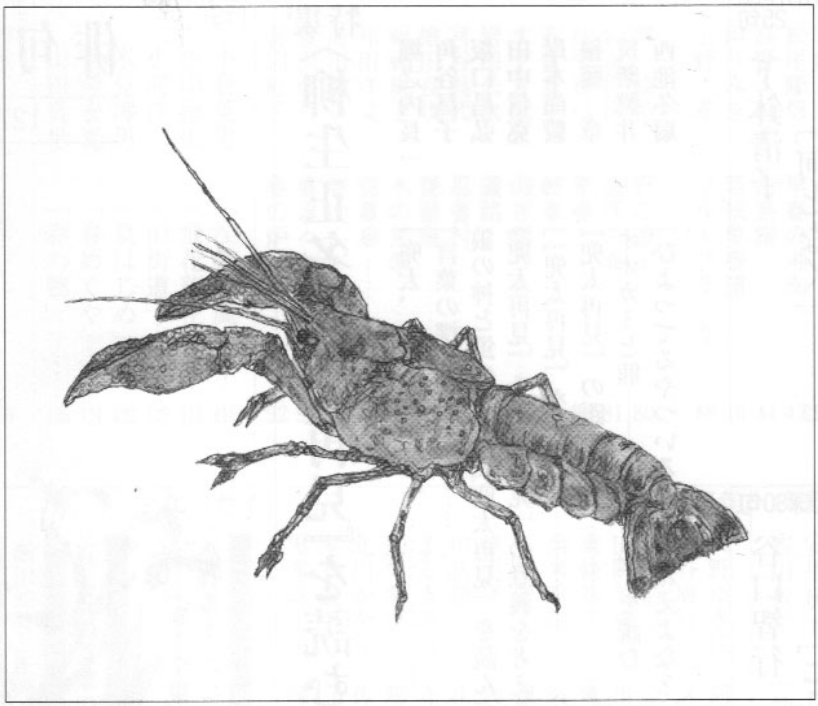


イラスト　田中丸葉子

蜊蛄（ざりがに）

蜊蛄も子の迎へ火のひとつかな　加藤楸邨

ざりがにの流れ歩きの蘆間かな　綾部仁喜

ざりがにあまた中の二匹の争へり　小澤　實

子供のころによくやったのはフナ釣りだが、夏場にはザリガニ釣りもやった。ザリガニを釣る餌にはスルメを使う子が多かったが、わたしはカエルの足をよく使った。カエルの足を手に入れるには、まずカエルをつかまえないといけない。ハリにミミズを掛け、水際に座っているカエルの前にミミズを垂らすと、パクリと食いついた。

そうして釣ったカエルを地面に叩きつけて殺し、皮をはいで足をひきちぎる。その足で池のザリガニはよく釣れた。半日ほどで、バケツに30匹も40匹も釣れることがあり、そんなときは家に持って帰ると、母が尻尾の方をちぎって殻を剝き、身をよく洗ったあと、醤油、砂糖で煮てくれた。それを食うと、歯応えもよく、結構うまかった。

以来、70年以上ザリガニを食ったことはないが、夏になって近くの公園にいくと、小さな流れで子供たちがザリガニを釣っている。のぞいてみると、プラスチックの容器にはよくて1～2匹のザリガニが入っているだけで、釣り餌はというと、みんなスルメを小さくちぎったやつを使っている。（大崎紀夫）

特別作品25句

何となく

下鉢清子

妙妙の初日綾なす富士の山

老人期背伸びなど無き筆初め

初鶏の気張りし声の明らけし

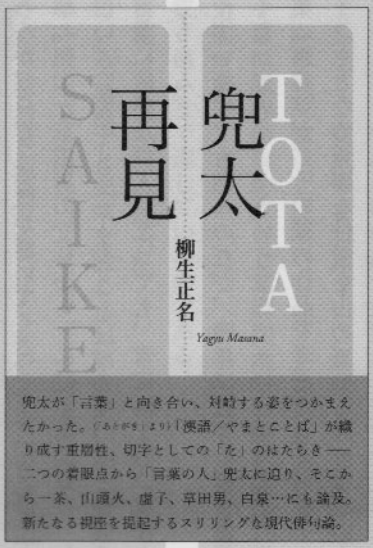
疫病(えやみ)猶鶯替へごとを先送り

何事も過去世(ぜ)諾ひお取初め

歌加留多正座叶はぬ齢もて

特集
〈柳生正名『兜太再見』を読む〉

「WEP俳句通信」103号（2018年4月）の兜太特集の論考、そして、104号（2018年6月）から123号（2021年8月）まで連載した柳生正名氏の「兜太再見」の前半部分を大幅に補筆加筆された『兜太再見』がこの2月、弊社より刊行されました。この著書を8人の方に読んでいただき、思うところをお書きいただきました。



超結社句会／新12番勝負

前列右から長嶺氏、川上氏、林氏
後列右から星野氏、藤本氏

ゲスト　今井　聖・川上良子
長嶺千晶・林いづみ

ホスト　星野高士・藤本美和子

編集部　超結社句会第59回目です。本日のゲストは「街」主宰の今井聖さん、「花野」主宰の川上良子さん、「晶」主宰の長嶺千晶さん、「風土」同人の林いづみさんです。今井さんは、昨日打ったワクチンの副反応が出てしまい、本日は欠席投句となりました。5句投句、7句選でお願いします。

高士　今日は4点が最高点です。さっそく始めます。

顔映る雲と田螺の間かな　良い高美

いづみ　実際にこういう経験はあるんですが、こういう句に出合ったことがなかった。素直に詠まれていて、のどかな感じが伝わってくる句でした。

美和子　頂いた句なんですが、少しためらいもありました。「雲と田螺」の間に顔が映っているということがお終いまで読めば分かるんですが、分かりにくいところがあるなと。でも、読みこなせば、いづみさんが仰ったように、確かにうららかで、のどかな光景だと思います。

良子　わたしは最近、大きな鉢にメダカを飼ったんですけ